

本態性肉眼的血尿に対する 猪苓湯の使用経験

慶應義塾大学医学部 救急医学教室
慶應義塾大学病院 救急科

田島 康介

キーワード

- 無症候性血尿
- 本態性血尿
- 猪苓湯
- ナットクラッカー現象

本態性血尿は患者にとって心理的負担であり、血尿が肉眼的に観察されるとすればなおさらである。今回の症例は1年以上も続く本態性肉眼的血尿に対し、ナットクラッカー現象との診断を行った上で猪苓湯を処方し、劇的な改善をみた例である。

はじめに

血尿とは尿中に赤血球が混在した状態で、肉眼で明らかに血尿を観察できるものを肉眼的血尿、顕微鏡検査による尿沈渣で赤血球を確認できるものを顕微鏡的血尿という。また血尿のみならず排尿痛、頻尿、残尿感などの自覚症状を伴うものを症候性血尿といい、それに対して明らかな自覚症状を伴わないものを無症候性血尿という。さらに、本態性血尿(特発性血尿；idiopathic hematuria)は、臨床検査では原因究明されない血尿をさす症候名である。本態性血尿の病態は顕微鏡的血尿から肉眼的血尿まで様々であるが、特に肉眼的血尿の場合、原因が特定されないまま血尿が続くことに対する患者の心理的負担は計り知れない。

一般に血尿の原因は、(1)膀胱炎などの尿路感染症(2)尿路結石(3)腎炎(4)悪性腫瘍(腎癌・尿管癌・膀胱癌・前立腺癌など)(5)そのほか腎血管腫・腎梗塞・腎結核など多岐に亘るが、そうした原因が判明しない場合は経過観察とするか、もしくは止血剤、抗アレルギー薬、そして漢方薬では猪苓湯による対症療法がなされることが多い。猪苓湯は一般的に血尿に用いられることも多いが、ここでは、筆者の治療以前には1年以上改善しなかった

特徴的な本態性肉眼的血尿の一症例を提示する。本症例は、ナットクラッカー現象(後述)を呈していたとみられ、猪苓湯により劇的に肉眼的血尿が改善した例である。本症例を通じて本態性血尿の病態を東洋医学的に考察する。

症 例

症例：39歳 男性

主 訴：血尿

現病歴：突然発症した1ヵ月以上続く肉眼的血尿により、前医泌尿器科を受診。KUB(腎・尿管・膀胱の単純X線検査)では明らかな異常を認めず、超音波検査では軽度の左水腎症を、腹部造影CT上で左腎盂の軽度拡張を認めるのみであった。経過観察となったが、初診後3ヵ月経過しても肉眼的血尿が改善しなかった。そこで膀胱鏡検査を行うも異常を認めず、さらに1年以上の経過観察でも肉眼的血尿が改善しなかったため、患者は漢方治療を希望し筆者外来を受診した。なお経過観察中、複数回の尿細胞診を行うも悪性所見を認めなかった。

現 症：初診時、患者は赤ら顔で、腹力は2/5、瘀血の圧痛点は左臍傍部に軽度に認め、また舌診で軽度の白苔と軽度歯痕舌、舌下静脈の怒脹を認めた(図1、2)。尿検査では肉眼的鮮血尿であったが(図3)、血尿以外の症状は無かった。また前医泌尿器科では検査所見に明らかな異常を認めなかったが、retrospectiveに前医画像を検討すると、造影KUB撮影で左腎が

図1 舌の所見(表側)



軽度の白苔、軽度の歯痕舌

図2 舌の所見(裏側)



舌下静脈の怒脹

図3 初診時尿所見



肉眼的鮮血尿

図4 造影KUB



図5 腹部造影CT画像

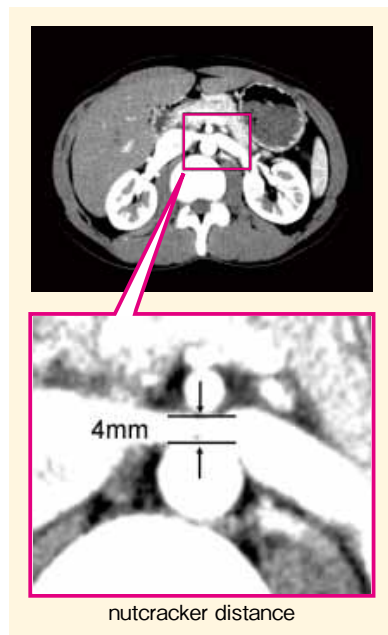
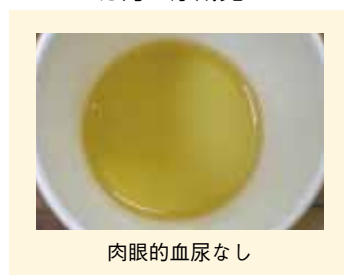


図6 猪苓湯服薬開始後3カ月の尿所見



軽度拡張しており(図4)、また腹部造影CT画像上 nutcracker distance(上腸間膜動脈後面から大動脈前面までの距離)が4mmと短縮しており(図5)、本症例の病態はナットクラッカー現象であったと考えられた。漢方医学的には本症例は虚証で、瘀血と水毒を認めた。

臨床経過：猪苓湯(KB-40、6g分2/日)を処方したところ、服薬開始1ヵ月で鮮血尿がロゼ色になり、3ヵ月の時点で肉眼的血尿を認めなくなった(図6)。6ヵ月を経過した時点で、顕微鏡的血尿は未だに認めるものの、主訴としての肉眼的血尿は無くなり、患者希望により廃薬となった。以後、1年を経過したが肉眼的血尿の再発は無く経過良好で、患者は満足している。

考察

本態性血尿の病態は顕微鏡的血尿から肉眼的血尿まで様々であるが、DeSchepperが提唱したナットクラッカー現象(nutcracker phenomenon)¹⁾は、本態性血尿の原因の一つと考えられている。ナットクラッカー現象とは、左腎静脈が腹部大動脈と上腸間膜動脈の間に挟まれることにより還流障害を生じ、左腎静脈圧の亢進による腎静脈系と腎盂腎杯系との異常交通によって無症候性の肉眼的血尿をきたす病態である^{2,3)}。ナットクラッカー現象の診断は、血液生化学検査、尿細胞診、各種画像検査、膀胱鏡検査等によって血尿の原因となる疾患を除外する必要があるが、現時点では

確立された診断基準はない⁴⁾。本症例も、各種検査で異常が無かったことから前医の画像診断を retrospective に検討し診断したに過ぎない。

『傷寒論』では、喉が乾き水を飲みたい、尿量が減少した、排尿が困難である、排尿痛や残尿感のあるものを猪苓湯の主な対象として挙げている。猪苓湯は五苓散とともに代表的な利尿剤であり水毒症状を認めるときに一般に用いられるが、止血作用をも有する点が五苓散と異なる。猪苓湯は滑石、沢瀉、猪苓、茯苓、阿膠からなり、前4者は利尿・消腫に、阿膠は滋陰止血に働く⁵⁾。本症例は軽度の左水腎症を認めており、猪苓湯の利尿作用により左腎静脈圧が低下し、阿膠の止血作用とあいまって血尿が改善したものと考えられる。ナットクラッカー現象の治療については、体格の変化から側副

路の発達により自然に血尿が消失することがかなり期待できるため経過観察とされる場合が多い³⁾が、本症例では1年以上の経過観察で改善がみられなかったため、漢方医学的治療を試みた。ナットクラッカー現象による肉眼的血尿に対して猪苓湯が有効であったとする報告はこれまでみられないが、猪苓湯の作用機序(利尿・消腫および滋陰止血)からも本症例に対する処方には理に適っており、猪苓湯は考慮されるべき処方と思われる。

「本態性血尿 = idiopathic hematuria」はあくまでも血液生化学検査、尿細胞診、各種画像検査、膀胱鏡検査などで異常を認めなかったという「除外診断」によってなされる症候名である。したがって止血剤や抗アレルギー薬、猪苓湯などが漠然と処方される機会も少なくない。しかしながら、そうした症例の中には、本症例のようにナットクラッカー現象という診断が可能な症例が多く潜在しているとも考えられる。ナットクラッカー現象は、本態性血尿の鑑別疾患の一つとして常に念頭に置くべき現象であると考えられる。

参考文献

- 1) DeSchepper, A. : Nutcracker fenomeen van de vena renalis en venue ze pathologie van de linker nier. J Belge Radiol 55 : p507-511, 1972.
- 2) Nishimura, Y. et al : Left renal vein hypertension in patients with left renal bleeding of unknown origin. Radiology 160 : p663-667, 1986.
- 3) 小松洋輔ほか：左腎静脈圧亢進症を伴った左腎出血とその追跡成績について。臨泌 41 : p957-960, 1987.
- 4) 大木隆弘ほか：血流変換術を施行したナットクラッカー現象の一例。泌尿紀要 45 : p183-186, 1999.
- 5) 高山宏世：猪苓湯：漢方常用処方解説。高山宏世編。第31版：p120-121, 泰晋堂、東京、2003.